

保育実習における指導案の現状と今後の可能性

The present conditions of the teaching plans
in the childcare training and future possibilities

小 林 美 花

KOBAYASHI Mika

北翔大学教育文化学部研究紀要
第5号 2020

保育実習における指導案の現状と今後の可能性

The present conditions of the teaching plans
in the childcare training and future possibilities

小 林 美 花

KOBAYASHI Mika

I はじめに

保育者養成校（以下：養成校）に在籍している学生が保育士資格を取得するには、保育実習は必須である。指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について（2018）保育実習実施基準第1保育実習の目的には、「保育実習は、その習得した教科全体の知識、技能を基礎とし、これらを総合的に実践する応用能力を養うため、児童に対する理解を通じて保育の理論と実践の関係について習熟させることを目的とする」¹⁾と定められている。これらの内容から考えても、まさに、保育実習は保育者養成の要となるものであり、学生にとっても実習はこれまでの学習した知識や、身につけた技術を現場で発揮できる重要な実践の場である。さらに、振り返りや反省を通して自己課題を明確化していくことができる貴重な学びの場でもあり、これらのことは、学生も講義や保育実習事前指導などを通して十分理解はしているだろう。しかしながら、学生は実習において子どもと関わることができる期待や、学びとして重要な機会であることは認識している反面、実習に対する不安も多く抱いているのが現状である。渡邊（2017）は、保育者を目指す専門学校生の実習に対する不安について、「子どもへの対応と保育実践・実習中のコミュニケーションと個人的課題・実習先の職員との関係」²⁾に集約されたことを明らかにしている。入江ら（2014）は、うまく実習することができず取り乱しそうで不安という指導力不安があるとし、これらの不安に対して親からの信頼感など、共生的親子関係によってその不安が低減化されると述べている。また、中原（2019）は、養成校における学生の実習前不安に関して質問紙調査を行い、そこから各項目の頻出後リストを分析した結果、全体的な傾向として「指導」や「部分」「全日」といった指導案に関する単語がどの年度においても確認できたことを報告している。菜原ら（2017）は、実習園と養成校の実習に関する意見交換の場では、学生の書くことの困難さが必ずと言って良いほど挙げられるとし、実習園側も学生に対して考慮し指導している現状を述べている。さらに、誤字脱字が多いことも課題とし、その原因として調べるという行為が定着していないことも報告している。大滝（2008）は、指導案の作成は実習生が難しいと感じる課題の一つであるとし、その理由に、実習先から求められる指導案の

書き方の違いがあることと、指導案作成のための参考書が多数存在するが、それらには、作成上の留意点が必ずしも明確ではないことを挙げている。このように、実習や指導案に対しては不安や課題が多くある中で、筆者は保育実習指導案の現状から、今後の養成校における指導案の事前指導の在り方などを、さらに検討することが重要であると感じている。

Ⅱ 目的

本研究では、学生が実際に作成した実習指導案と調査結果から、指導案における現状を把握し課題を明らかにすることと、学生の指導案に対する不安が少しでも軽減されるための、今後の養成校における講義や指導の可能性を見出すことを目的とする。

Ⅲ 方法

3-1 調査期間・調査対象者

本研究の調査対象は、本学こども学科2年生で、保育実習指導ⅠBを履修している105名の学生である。調査期間は、保育実習が終了した2019年9月から10月までである。

対象学生には、本研究の趣旨を口頭で説明し、調査の結果及び記述内容、指導案の記述内容の使用について同意を得て行った。

3-2 調査方法

調査方法は、学生が保育実習（保育所）で実際に作成した指導案及び保育実習指導ⅠBの授業内で実施した調査の記述内容から考察した。

Ⅳ 指導案作成までの授業の流れ

4-1 指導案作成までの事前学習

保育実習（保育所）において、学生が指導案を作成する上では、養成校での事前指導は必要である。また、指導案自体に不安な学生が多い中では、学生が安心して指導案を作成できるようになるための時間も必要である。本学では、実習事前指導科目として「保育実習指導ⅠA」を1年次後学期と、「保育実習指導Ⅱ」を2年次前学期に配置しているが、実習の目的や事前学習、日誌指導や身だしなみ、マナーの指導などで時間を有しているのが現状である。そこで、実習指導案については、筆者が2年次前学期担当している「保育課程論」の授業（全15回）の内、短期指導計画日案作成の時間（5回）の授業において、実際に実習指導案を用いて作成の取り組みを行った。実習指導案を使用した理由として、実際の保育現場では日案の書式が多様である中で、養成校において統一した書式を使用し学習することで、日案の目的や基礎的な作

成の方法を理解することが可能であると考え、実習指導案を使用した。また、使用した指導案は、活動内容、活動内容に対するねらい、準備物、時間、環境構成、活動の流れ・予想される子どもの活動、実習生の援助・働きかけ及び留意点、実習生の感想・反省・振り返りの項目で構成されている基本的な書式であり、就職後にはこれらの学びを、現場の書式に合わせて応用できると判断したことも理由である。

次に、指導案作成に取り組んだ保育課程論の授業のねらいと到達目標を下記に示す。

(ねらい)

保育所における全体的な計画の意義や内容について理解し、子ども一人一人の個性や個人差を踏まえた指導計画を実際に作成し、計画に基づく保育実践、記録による反省、評価、改善を行うことができる力を身につける。

(到達目標)

- (1) 保育内容の充実と質の向上に資する保育の計画と評価について理解する。
- (2) 全体的な計画と指導計画の意義及び作成方法について具体的に理解する。
- (3) 計画、実践、省察、評価、改善の過程について全体構造を動的にとらえ理解する。
- (4) 子どもの発達を促すための保育実践と指導計画の関係について理解する。

本授業では、上記のねらい及び到達目標が達成できるよう、5段階に分けて授業を実施した。各段階ごとの授業の内容を表1に示す。

表1

| 段階 | 具体的な内容 |
|----------------|---|
| 1 第1,2回授業 | ・保育所の歴史と保育所保育指針の変遷 |
| 2 第3,4回授業 | ・保育の計画と評価の基本 ・全体的な計画とは ・保育実践の記録と評価 ・PDCAサイクルについて |
| 3 第5～7回授業 | ・保育所における保育の計画 ・全体的な計画とカリキュラムの関連性 ・指導計画の種類 ・子ども発達過程を踏まえた長期指導計画と短期指導計画 |
| 4 第8～12回授業 | ・保育の計画の作成と展開 ・製作活動（ストロープレスレット・ビニール袋を用いた魚製作・ロケット作り） ・保育内容と環境構成について ・各年齢に応じた指導計画の作成 |
| 5 第13～15回授業 | ・保育所における保育の評価 ・保育所における指導計画の意義 |

指導案作成については段階4で実施した。作成までの手順としては、授業内または、次週までの課題として製作活動を学生が作成し作品を完成させる。そして、学生が製作活動を通して、難しいと感じた点工夫する点など自らの経験を踏まえ、各年齢の子どもの姿を予想する。次に、活動を行う際に最善であると考えられる環境を構成し、活動を行う際の実習生の援助・留意点を考

察し指導案を作成するものである。

指導案を作成する上で重要な点は、まず子どもの姿が予想できることである。なぜなら、子どもの姿が予想できなければ、最善の環境を考えることも難しく、何より何を援助すればもっと子どもの活動が豊かになるのか考察することも難しいであろう。加えて各年齢の発達理解も重要である。太田ら（2018）は、「働きかける相手にふさわしい行為ができてこそ、相手の望ましい反応や成長が期待できる」⁶⁾と述べており、年齢にふさわしい活動ではない場合、活動そのものが子どもにとって楽しいものとならない可能性を示唆している。しかしながら、子どもとの関わりの経験が少ない学生にとっては、子どもの姿を予想することが難しいのが現状である。そこで、指導案作成における子どもの姿を予想する上では、まず第一に、これまでの実習の経験を活かし予想すること。（本学では、保育実習の前に認定こども園における2日間の観察実習と教育実習（幼稚園または小学校）が終了している学生がほとんどである。）第二に、これまでの学びにおいて、各年齢の子どもの発達や具体的な発達に応じた遊びを実践的授業において学んでいるため、これまでの授業を振り返り子どもの姿を予想するように伝えた。そして、実習生の援助留意点においては、単に学生自身が行う内容を書くのではなく、「どのようにすれば子どもが楽しく活動をすることができるのか」「そのために、学生自身が工夫する点や気をつけること」に重点をおいて作成するように伝えた。

V 結果

5-1 調査結果

保育実習（保育所）終了後、保育実習事後指導科目である保育実習指導 I Bにおいて、指導案等に関する調査を無記名で行った。調査内容は14項目で、本研究では14項目中指導案に関する9項目の結果を対象とした。調査内容と結果を表2に示す。

尚、回収は103名であり記述に不備があった3名と、指導案を作成しなかった3名を除く97名を対象とした。

表2

| | 質問内容 | 回答 |
|---|---------------------------------|---|
| 1 | 保育所実習において設定保育を行った | はい：97名 |
| 2 | 1で「はい」と答えた学生は、どのような設定保育を実践しましたか | 部分実習のみ：66名 ※部分実習とは、1日実習以外の半日、1時間程度、絵本の読み聞かせなどを部分実習とした。 1日実習のみ：8名 部分・1日実習両方：23名 |
| 3 | 保育所実習において指導案を作成した | はい：97名 |
| 4 | 指導案は何回書きましたか | 1回：44名 2回：41名 3回：5名 上記以上：7名 |

| | | |
|---|--------------------------------------|--|
| 5 | 指導案の作成にどの位の時間がかかりましたか | 1時間以内：11名 2時間以内：48名 上記以上：38名 |
| 6 | 指導案を書くことは負担でしたか | はい：41名 いいえ：56名 |
| 7 | 6の理由を教えてください | はいと回答した理由で多かった内容 ・日誌と指導案を書くことが負担であった いいえと回答した理由で多かった内容 ・子どもの様子を思い浮かべながら、作成することが楽しかったため 12名 ・授業で指導案をたくさん書いていたため 11名 ・指導案を作成することで、当日の流れなどが把握しやすい 9名 ・他：実習前に指導案の準備をしていた 特に理由がなしなど 65名 |
| 8 | 指導案を作成するために、参考にしたものは何ですか（自由記述・複数回答可） | 大学の授業：76名 ※保育課程論で使用したテキスト・プリント 他科目で使用したプリントなど インターネット：17名 ※保育に関するサイト その他：21名 ※図書館で借りた本・教育実習で作成した指導案・参考資料なし等 |
| 9 | 実際に行った設定保育の内容を教えてください（複数回答可） | 製作活動：44名 ゲーム活動：43名 その他：11名 |

5-2 指導案の内容

学生が実際に保育実習（保育所）で作成した指導案の内容の一部である、予想される子どもの姿と実習生の援助・働きかけ及び留意点を4名の学生から抜粋し下記に示す。尚、4名の学生を選んだ理由は、授業で実施した製作活動（ロケット製作）を実施した指導案であるという理由で選んだ。

ロケットは、4名共に紙コップを2つ重ねて輪ゴムの原理を利用して飛ばすことができるものである。1つの紙コップには、ロケットの翼や模様を子どもが自由に描くものである。

学生A 対象児：5歳児

| 活動の流れ・予想される子どもの活動 | 実習生の援助・働きかけ及び留意点 |
|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・説明を聞く ・ハサミを触る子どもがいる ・実習生の手本を見て付ける | <ul style="list-style-type: none"> ・ハサミを配る ・全員に配り終わるまで待つように伝える ・全員に配り終えたら説明をして切るように合図をする |

学生B 対象児：5歳児

| 活動の流れ・予想される子どもの活動 | 実習生の援助・働きかけ及び留意点 |
|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・色鉛筆で紙コップに自由に絵を描く | <ul style="list-style-type: none"> ・色鉛筆を使って、紙コップに好きなように絵を描くよう言葉掛ける |

学生C 対象児：3歳児

| 活動の流れ・予想される子どもの活動 | 実習生の援助・働きかけ及び留意点 |
|--------------------|-----------------------------|
| ・作り方を理解していない子どもがいる | ・作り方を理解できているかどうか子どもの表情を観察する |

学生D 対象児：3.4歳児

| 活動の流れ・予想される子どもの活動 | 実習生の援助・働きかけ及び留意点 |
|---------------------------------|------------------------------|
| ・輪ゴムをかけることができず、実習生に手伝ってほしいと要求する | ・近くで見本を見せたり、手を添えて一緒に行ったりなどする |

Ⅵ 考察**6-1 調査の考察**

調査結果から、実習を実施した9割以上の学生が、指導案を作成し設定保育を実施していることがわかった。また、1日実習より部分実習のみを実施している学生が多く、作成回数は1.2回の学生が8割以上であった。しかし、指導案の作成時間においては、4割近い学生は2時間以上の時間を費やしていることがわかり、最長時間は10時間という学生もいた。一方で、指導案を作成することが負担かどうかの質問では、負担ではないと回答した学生の方が多かった。1番多かった理由に、子どもの姿を想像しながら作成することが楽しいなど、肯定的な考えの学生が多かった。これらの学生は、子どもがより楽しめるようにするためには、どのような準備や配慮が最善であるかなどの、子どもがより活動を楽しめるための指導案を作成しようとしていると考察できる。反対に、指導案を作成することで当日の流れが把握できるなどを理由に挙げている場合は、学生自身の指導案になっているのだろう。また、指導案作成において参考にした内容では、授業でのプリントやこれまでの授業で実践した実技など、養成校での学びを現場で活かしていることがわかる。これらから、学生は自己体験を実践の場で活かしていることがわかり、自己体験の有効性が実践や指導案にもたらす影響が大きいと考察できる。

6-2 実習指導案からの考察

学生Aは、実習生の援助・働きかけ及び留意点において、実習生の行動のみの記載となっている。子どもの姿でハサミを触る子どもがいると予想しているならば、実習生の援助や留意点として、ハサミを配る前段階で気を付ける点を子どもに伝えることが必要であるだろう。

学生Bは、紙コップに絵を描きロケットを作る活動であるが、5歳児であっても紙コップに絵を描くことは難しく、中には紙コップがつぶれてしまったりする子どももいるだろう。この場合、もう少し事前に実習生の具体的な援助や説明が必要になるだろう。

学生Cは、3歳児であるため、1回の説明では作り方が理解できない子どもがいると予想している。しかし、働きかけや援助において、どのような説明をすることで理解できるなどの、気を付ける点や具体的な方法の記載はない。

学生Dは、3.4歳児の異年齢を対象としており、出来ない部分を実習生に助けを要求する子どもがいると予想し、具体的に再度手本を見せることや、手を添えて一緒につくるなど、具体的な関わりが記載されている。しかし、3.4歳児合同ということを考えて、作る時間に差が生じることも考えられるなど、もう少し子どもの姿を予想する必要があるだろう。

学生の指導案から、指導案を作成する時間的余裕がなく、まずは、作成すること自体が目標となっていることが考察できる。そのため、学生自身の働きかけによって、子どもの活動がより楽しくなることや、そのための具体的な働きかけまで考えられない状況ではないかと考えることができる。

Ⅶ まとめ

調査結果及び学生の指導案から、短い実習期間で時間的余裕がない中で、学生は子どもの姿を捉え想像し、可能な範囲の援助や留意点を考えていることがわかった。しかし、実際はより子どもが活動を楽しむことができるような具体的な援助や留意点が不足しているのも現状である。そして、これらに気が付くのは実際に設定保育を行い、その経験を通して気づくものであり、その気づきを振り返り、次に活かしていくことが実習では大切である。しかしながら、短い実習期間であることや保育現場においても日々の保育計画があることを考えると、何度も設定保育を行うことは難しく、現実には1回又は2回の実施が限度であろう。1回の場合は振り返りや反省を次に実践として活かすことが難しい。このように考えると、実習後に養成校においてこれらの振り返りを活かす時間や、場面が必要になってくると考える。例えば、実際に行った設定保育を学生同士で実施し更なる振り返りを行い考察するなどの必要が、今後の課題の1つの可能性として挙げられる。さらに、2回以上設定保育を行っている学生のほとんどが、異なる活動を行っており、学生の中では異なる活動を行わなければならないという考えが強いのもかもしれない。また、保育現場においても異なる活動の設定保育を実践することを通して、多様な経験をしてほしいという考えもあるかもしれない。しかし、実際に設定保育を行い振り返り反省し、再度設定保育が実施できる場合は、同じ活動内容の方がより子どもの姿を想像し、自身の働きかけや留意点を考察した計画が可能なのではないか。指導案も新たに書き直すのではなく、学生の負担も考慮すると前回の指導案に加筆していくなどすることで、指導案の内容もより活かしたものとなり、学生の負担も軽減となるかもしれない。このように考えると、指導案における改善の可能性は多様に考えることが出来るのではないか。また、これらについては、養成校のみではなく現場との連携も必要であることを踏まえると、今後の最大の課題は養成校と現場の連携、協働ではないかと考え今後も本研究を継続していく。

引用・参考文献

- 1) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局長 指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について

一部改正 子発0427第3号 2018年4月27日

- 2) 渡邊舞 (2017) 保育者養成課程で学ぶ「専門学校生」は実習に対してどのような不安を感じているのか-実習不安尺度の作成と自己効力感の関連-豊岡短期大学論集 第14号
- 3) 入江和夫・福地昭輝・入江三津子 (2014) 学生の保育実習不安と自立感 山口大学教育学部付属教育実践総合センター研究紀要第38号
- 4) 中原大介 (2019) 保育者養成教育における実習前不安に関する一考察 福祉健康科学研究 (14) 065-075.
- 5) 葉原桂子・小林美花 (2017) 幼稚園教育実習・保育所実習における指導案の現状と課題北翔大学短期大学部研究紀要第55号
- 6) 大滝まり子 (2008) 幼稚園実習における指導案作成の留意点 北海道文教大学研究紀要第32号
- 7) 太田節子・関口はつ江他 (2018) 学びをいかす保育実習ハンドブック 大学図書出版p9.
- 8) 林富公子 実習の実態と立案指導 夙川学院短期大学教育実践研究紀要 33-39, 2016
- 9) 久松尚美・東真美子・小澤拓大 保育実習準備の充実に向けた取り組み 宮崎学園短期大学紀要 Vol.11 2019
- 10) 一般社団法人全国保育士養成協議会 保育実習指導のミニマムスタンダードVer.2 2018
- 11) 林理恵 短期大学保育学生の保育指導案作成に関する考察 幼児教育WEBジャーナル 第1号 2018